

2015. 4. 30 (木)

関西学院と出会う－中央芝生の羊

永田 雄次郎

はじめに

先週 Grubel 先生が「関西学院、関学と出会う」というお話をされたと、今お聞きしました。今日は、ちょうどその続きのお話になるかもしれません。Grubel 先生の後で、私のような文学部の凡庸な教授が出てきて話をして「ああ」と思われるかもしれません。聞いていただきたいと思います。Grubel 先生のお話は甲山に向かってというお話だったと伺いました。これは聖書の詩編 121 篇と関係しているわけですが、今日はその続きで、詩編 23 篇が関学とどう関係しているのかという話をいたします。

このお話は恐らく何回もこれからお聞きになるかもしれません。またかと思われる方がいらっしやるでしょう。時計台、そして今日私は中央芝生のお話をしますけれども、正門に入った時のこの景色というふうなものには、ただ単に私たちを迎えてくれる以上の内容を持つということについては、何回もいろいろな先生がお語りになるでしょう。関西学院というこの学校において時計台を見、甲山を見、そしてまた中央芝生に寝そべることがどのような意味を持っているのか、特に、一年生の方にとっては、これが意外に大切なことであると考えていただい

いのではないかと思います。

さらに、関西学院と出会うということに関して、皆さんにはこれからさまざまな出会いがあると思います。人と出会うことも関学との出会いだと思います。また、モノと出会うということ、本との出会いもあるでしょう。そしてまた、関西学院を取り巻くこの周囲の環境との出会い、これも出会いの一つです。社会学部で出会うということでしょうか。これが大事であるということもありません。関西学院大学社会学部で学問をする、そしてそこで友と語り合う、友と遊ぶということでもいいと思います。教員とも出会うでしょう。同級生とも出会うでしょう。先輩とも出会うでしょう。そこで人生を語り合うということも大切だと思いますし、私にとっても学生時代の非常に大きな思い出の一つとなっています。

1. 私が関学に入学したころ

私は、1969年の入学生ですから「わー、もう古い昔のことになったな」と思っています。この時、関学は学園紛争の最中でした。大学の授業が始まったのが6月30日で、まだ学校が始まっていない封鎖中の時に、一年生として入学しました。その中で私

たちは先生とも語り合いましたし、友達とも先輩とも語り合いました。そして、友達と「私はこんな学問をするんだ」「僕は哲学をするんだ」「僕は日本史をするんだ」「まだ分からないけど日本文学になるかな」とか「美学をやろうと思うんだ」「なんだ？それは」という感じで話をしたこともよく覚えていません。いろいろなこの世の中の出来事なども話題となりました。2年生の時に、三島事件という世の中を震撼（しんかん）させる事件が起きました。三島由紀夫という作家が市ヶ谷の駐屯地に立てこもって、そこで自殺をするという大事件がありました。すぐに銀座通りで友達が「今こういうことがあったんだぞ」と語りかけ、彼の下宿に行っているいろいろ話合ったことも非常に懐かしい思い出です。私には文学部を中心にそのような出会いがありましたが、その中だけのものではないことも事実です。ですから、皆さんも社会学部以外の人と出会うことを数多く体験されることでしよう。

幅広い考え方を手に入れるという意味でも、他の学部の人々と出会われることは非常に大事なことだと思います。「ああ、これだけ違うのか」というふうなことを感じるができます。私は文学部で美学芸術学入門と日本美術史の講義を受け持っているのですが、そのような目で見ている人間との出会いが、皆さんにとってまさしく、今日だと思っ、て、お話を聞いていただけたらと思います。長いイントロダクションになりましたが、まず美術を通して見た関学ということをお話しましょう。

2. 人間の目線

先週の Grubel 先生のお話は「上ヶ原キャンパスに入って時計台があって、時計台の後ろに甲山があり、山を見上げる。わが助けはどこから来るのか」とい、それは、わが助けは高いところから来るのだよ」に始まったことでしょう。私たちは日常「つらい」「ああ……」と思うこともありますが、自分の研究をしている時、「もっと深いのだな」「ああ、もっともっと高みがあるんだな」と思って目線を上げることだとも思います。

美学の立場で少しお話をしますと、実は目線というのは非常に面白くて、私は今は担当していませんが博物館学という科目の講義の中で、絵画作品をどのように展示をするかということをよくお話したものです。例えば壁に絵を張るとすると、日本の仏教の絵画でもキリスト教の絵画でもいいのですが、宗教の絵画は絵画の中心を自分の目線より少し上に上げます。なぜかといいますと、上方は「尊敬の空間」と私はよく答えます。目線を少し上に上げると「自分以上のものがあるのだな」とか、「自分より聖なるものがあるのかな。それに比べると自分はまだここにいるのかな」という考えが浮かんできます。そのような尊敬を表すときには絵も少し上に上げるのです。

そして、人物画などの場合はどうするかというと、だいたい目線を絵画の中心に真つすぐに合わせます。同じような目線というのは、皆さんもそうでしょう。お友達とお話をするときに、同じ目線の高さで話すことが大事なことで、しょう。背の高い人と低い人がいますから、例えば私の非常に親しい文学部の宗教主事の先生は、2メートルぐらいの背の

高い先生で、私が話す時はいつも少し上を見るようになってしまいますが、これは仕方ありませんね。お友達とはやはり同じ目線の高さで話します。これは「平等の空間」です。

植物や花などの絵などは、少し下げて展示するとなかなかいいものです。目線より下というのは「親しみの空間」と言います。自分たちの身近な物を置くときには、例えばすみれの花の絵をあまり上に置いても仕方ありません。すみれの花は下にちょっと置いたときに「あっ、かわいいな」と感じます。つまり、工夫というものがあります。

それと同じように、私たちは目を上げるといふこと、尊敬するといふこと、自分の力を超えた世界があるといふこと、そのことをあの甲山、そして詩編の121篇が語ります。聖書を見てみましょうか。「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。」(『旧訳聖書』詩編121編)

目を上げて山々を仰ぐといふことは、偶然にそのようになったのでしょうか。それは違います。この学校は1929年に神戸から移転してきたわけですが、その時にデザインをしたヴォーリズという有名な建築家が、ちょうどここから見た甲山があって、時計台があって、そして目を上げるという、そのような意図でつくったものなのです。

3. 中央芝生の羊

そしてもう一つは、私たちは広々とした中央芝生の緑に豊かな美しさを感じるでしょう。そう思いませんか。関西学院がきれいだ

なと思うときには、必ず中央芝生と時計台、受験雑誌で関学が出るときには、必ずそこが出てくるでしょう。フォトジェニックという言葉があり一番写真に映える姿かもしれませんが、これもヴォーリズという人の意図でもあるのです。山を仰ぐということもありますが、実は、広々とした中央芝生の緑、その豊かさというものもそこに存在しています。

今日、中道先生に読んでいただいたこの聖書の箇所「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴ひ、魂を生き返らせてくださる。」(『旧訳聖書』詩編23編)と書いてあります。疲れたとき中央芝生で休みをとる羊となることができるという、その意味を込めて、あの豊かな緑の中央芝生があるのです。

中央芝生のことを人々が上ヶ原牧場と言ふのを、何回も聞くことがあります。「関学はね、ぬるま湯みたいな学校なんだよ」というわけです。「いつも中央芝生で牛みたいにゴロゴロと寝ておるじゃないか」などと言われるときには、皆さんは「そうじゃないんだ。牛じゃないんだよ、羊なんだよ」といふことを、まず言ってください。「羊を休ませてくださるんだよ」といふこと、それは聖書の言葉なのですと。

私たちは授業で疲れることもあるでしょう。毎日疲れることだってあるでしょう。そのときにはゴロンとなってもいいのです。そこで人々と語り合ってもいいし、羊が、もう自分一人だけになりたくて芝生でゴロンと昼寝をしてもかまいません。友達に「あいつはまだどこかに行ってしまったな」と思われても大丈夫です。例えば、100匹の羊がいて1匹だけ迷ってあそこで寝ていてもいいので

す。その1匹を神様は大事に探してくださいるのだという意味も込めてあるのです。そのような安らかな、あの芝生ですよということです。このような関学と出会うことも、とても大切ではないだろうかと思いませんか。疲れたときなど本当に、もう一度言いますと、中央芝生で休みをとる羊となることができません。つまり休みというもの「豊かなお休み」という意味になるのです。

今、お話しした出会いは、果たして他の大学であるでしょうか。さまざまな休みの場所がありますが、本当にオープンに休める、そしてそれも神様の護りの中にあつて休むということが可能でしょうか。「私はキリスト教じゃないから関係がない」それはそれでいいのですが、このように考えることとか、そのようなことが聖書に書かれてあることを知っているのと知らないのとでは、これからの生きていく間に少し違いが出てくるのではないかと私はいつも思うのです。

おわりに

人はそれぞれ違う環境に入ったときに今まで述べてきたさまざまな想いが出てくるかもしれませんから、その答えはここでは言いません。その効果はまだここでは皆さんが十分に実感することもできないと思いますが、皆さんにとって、関学と出会い関学で伸び伸びと生活をしているということ、その後ろで関学に護られているというふうなことを覚えておいてください。教職員が護るとかそのようなことではありません。関西学院はつくられ

た時から「神様によって建てられた」というようなことをよく言います。「そんなことがあるか。神様はどこにいるの?」と思うかもしれませんが、やはり何か自分以上の力で関学は護られています。

もう一つ大事なことは、愛されているということも関学での出会いで思ったらいいのではないのでしょうか。皆さんは、愛することはできても愛されるということがなかなか実感できないとよく言いますが、そうではありません。愛されている、一番神様に愛されて、皆さんは毎日生活を送っています。特に関西学院においては、そういう意味で、寝そべて空の広さや美しさを感じることによって、美しさの中に新たな生きる力が再び湧いてきます。

そのような関学に皆さんが出会われるということは、本当に素晴らしいことではないかと考えます。目を上げて山を見えるということ、そして、青草の原に休ませてくださる羊、これが関西学院なのです。ただ休んでいるばかりではいけませんよ、休むというのは疲れるということが前提条件です。それまでにはやはり、一生懸命ものを見て聞いて考えるということをお大切に毎日を生きたらと思ひ、行動し続けることです。皆さんとともに教員も、同級生も、先輩も、関学の中で毎日を生きたら、その時には中央芝生の緑というものの意味も、ぜひ皆さんの心の中に留めていただけたらと思ひます。それが、今日の私のお話です。

(文学部教授)